

為兼集と為兼歌風の生成過程

池田富藏

一、為兼集と片山豊樹

最近私は行橋市の元社家片山豊孝氏所蔵の為兼集を発見した。この家集は刊本であり、その内容構成は、(一)「為兼集」(二十六帖)、(二)「為兼家集補遺」(廿七帖裏表は遊紙▽―四十五帖)、(三)藤為兼卿伝(最後の十帖)の三部から成る。(一)には、「慶長三巳八月二日 函書為景判」という奥書がある。為景は儒者惺窩を父とし、定家十二也の孫。正四位下在中将。詩文和歌をよくし、後水尾天皇に仕え、学を講じた。承応元年(一六五二)四十一才の若さで没している。本書の伝本については奥書によると父の所持していた「為兼卿集」を僅か二日間で書写し、その正本は、中院大納言通勝の手跡で門外不出の秀れた秘本であることを記している。通勝(弘治二八―一五五六▽―慶長一五八―一六〇▽五才没)は通為の男。正三位権中納言に至る。和歌を好み、三条西実枝、細川幽齋らに師事して古今伝授の正統を継いだ。「中院本平家物語」など古典を書写し、有名な源氏物語注釈書「民江入楚」の著者。古典学者として多くの功績を残し、家集には「中院素然詠歌」、「中院也足軒詠七十六首」、「冬

為兼集と為兼歌風の生成過程

夜詠百首和歌外十種」などの私家集があり、そのほか日記に「継芥記」を残している。

次の(二)については、本書伝来にも尽力した近也の北川真顔の文政元年(一八一八)の奥書があり、これは続々類從第十四歌文部にも収められており、勅撰入集の為兼の歌を見るのに最も便利な資料となる。またその後を追記された(三)「藤為兼卿傳」は、近世においては最もくわしくまとめられた評伝と言える。

ところで、本書刊行の由来については岸本由豆流(寛政元八―一七八九―弘化三八―一八四六▽五八才没)の徳源あつてのことでその刊行経過を記した抜が付せられている。北川真顔が「為兼卿家集」を刊行して始めて公になったことの功績を称え「この集のかくおほやけになりぬることは歌の中みちふみならせる人たちのいとよきしるべならむかし。さればこの集見ん人かのくもりがちなる野守の鏡にこころうつさで北川の清き流れにこそよるべけれ」とあり、「つちのえとらにあたれるやよひつごもり岸本由豆流しす」と結んでいる。真顔が刊行した文政元年にただちに追記したものと思われる。さて、「為兼集」という家集については、続群書類從卷四三二に

「入道大納言為兼卿集二通」として所収されている。この二通についてはすでに先学小原幹雄氏の詳細な研究調査がありこれに負うところが多い。この二通（二集）の「為兼集」は(1)前集(2)後集と呼んでもよろしい。(小原氏は前集を「甲集」、後集を「乙集」と呼称している)この二集は、私撰集であつて、為兼自身の撰ではなくて、後人の撰になり、しかも「前集」、「後集」とも時代的に隔たりがあり、その撰者もまた異なる。なお、「為兼集」とはあるが、為兼個人の家集ではなく他人の歌の方が多いという内容を持つ特殊な家集である。

片山家所蔵刊本は、(2)の「後集」にあたる。後集の内容については後述するが、福岡県豊前国の行橋市元永の片山家になぜ、「為兼集」(後集)の刊本が所蔵されていたかということについてはそれなりの十分な理由があつた。その理由につきいさか述べておく。名著「京都郡誌」(伊東尾四郎編・大正八年刊)第十章人物「第二節学者教育家及文人」の項に次の記事がある。「片山豊樹」の条に、「片山豊樹は今井祇園社の祠官なり。村上弘山、西田直養、佐久間種に從ひ学ぶ。最も歌に長す。明治八年没す。享年四十七」と別稿「北豊の歌人」の一節を簡単に引用している。豊樹は片山家系における傑出した歌人であり、幼名を一と言ひ、又、岩彦、豊樹などと称したが維新以後は専ら豊樹を用いた。幼にして村上弘山(文化七年八一八一〇〇―明治二年八一八七九七〇才没・行橋市神田出生)の漢学塾「水哉園」に学ぶ。一方、十六才頃から小倉六歌仙のうち西田直養、佐久間種らに歌を学び、筑前の伊藤常足(太宰管内志の著者)にも歌の指導を受けたこともある。西田、佐久間の

紀行文を見ると片山家に宿泊したこともしるされ、温い師弟愛をかい間みることが出来る。嘉永二年(一八四九)四月、従五位下を授けられた。二十一才の時であつた。こうした環境にいた片山家に和書、歌書の蔵されているのも理由あることである。神宮片山家の遠祖は塩田太郎豊忠で、代々塩田に居住して現在の豊孝氏に至る。塩田というのは現在の元水地区のことであり、豊忠は天曆六年(九五二)に妙見社を建てた。和歌史的にみれば「後撰和歌集」を撰進した翌年にあたる村上朝で古い社歴をもつ。豊樹を中心とした略系を示すと次の如くなる。(○印の中の洋数字は代を表わす)

① ○塩田豊忠……片山豊満……豊貫―豊樹―豊盛―豊敏―豊孝

豊樹の孫豊敏氏は連歌を好み祇園社奉納連歌一巡の座の位置が決まっていた晩年に至るまで豊鏢として祖父豊樹伝来の家系を守り、殊に祇園社奉納連歌については新しい連歌再興に尽力したが昭和四十六年に逝去された。豊敏氏生前には私も幾重か連歌の座を共にし、久しく昵懇にしていた。当主豊孝氏も亡父の跡を継承し連歌発句定めの日(七月十五日・福島家邸宅)には決った一巡の座に着く。

二、片山豊樹本「為兼集後集」の特色

先にも述べた如く続群書類従本の「為兼集」の前集、後集については小原幹雄氏の詳細な研究報告がなされている。「後集」は全体的にみて正徹・耕雲・為兼の三人の歌を中心に、しかもそれは幾つかの集団として編集されていることもすでに指摘されている。最も

歌の多いのは正徹の九九首、耕雲の六二首、為兼の歌は三三首にすぎない。その他、経信二首、後村上院、為邦、為重、為家、為家、定家、頼政、道家の各一首、詭人不知の一四首、未詳の五七首となり、全歌数(重複を含めて)二七七首となっている。そのあとに続類従本と同じく為兼佐渡配流の短歌三二首(但し三二首の初句と結句の最後を読むと二集の「沓冠」の折句の二首が詠みこまれて三三首の歌となる)が添えられている。本稿においてはこの「後集」を対象に片山家本との比較をするのが目的で、続群書類従本と異なる点を中心に以下考察してみたい。

(一) 歌数のこと

続類従本には重出歌が三首あるが片山本にはそれがない。三首を示すと次の通り。(上の番号は続類従本に付けた通し番号。下の括弧内の番号は重出歌)

春夜家に歌合しける時

⑧ かつ散も梢もいまを盛にて月もる庭のはなの下蔭 (11)と重出

(為兼の歌)

露

⑨ いつくより置ともしらぬ白詩のくるれば草のうへにみゆら舞 (12)と重出

(為兼の歌)

夏夕

⑩ 草しける野守のかかみ春日野に半はみかける夕月のかけ (13)と重出

(正徹の歌)

以上三首の歌は片山本にはないので歌の実数は二七四首となる。

(二) 出典歌集を銘記している歌(上の括弧内の番号は片山本の通し番号)

為兼集と為兼歌風の生成過程

号。初句のみを記す)すべて為兼の歌のみで、一三首である。
 ⑧ かつ散も…藤葉和歌集。③ 春雨は…柳風集。⑥ いつくより…柳風集。⑦ すみのほる…新後撰。⑧ 時鳥…風雅集。⑨ 月のこる…玉葉集。⑩ 夢路まで…新拾遺。⑪ 吹たゆる…風雅集。⑫ 闇のうへは…玉葉集。⑬ するへする…風雅集。⑭ 鶯の…新後撰。⑮ 闇のうへは…藤葉和歌集。⑯ 仙洞五十番歌合。⑰ ふかくなる…藤葉和歌集。以上。
 (三) 豊樹がかなづかい、校異などにつき朱筆を以て訂正した個所のある歌。(初句と訂正個所と作者名とをしるす)

⑬ 我ひきし…なをいはふらむ (作者不詳)

⑲ 妻こふる声もしられずさえしのの (作者不詳)

④ こぬ人の…我やはゆかむ (耕雲)

⑦ 七夕の…猶たたぬ (耕雲)

⑦ 朝霜は…こころをけとも (経信)

③ 氷室山…高津の宮の (正徹)

⑩ 山かけや…お鹿妻とふ (為兼)

⑪ 片岡の…夕立をくる (耕雲)

⑬ かけて行… (為兼) ⑬ 白妙の… (詭人不知)

⑯ 憂也には…なを有明の (耕雲)

たえ
⑴消やらぬ…(耕雲) ⑴たへく…(耕雲)

お
⑵をのれのみ…かよひもたへす(耕雲)

⑶槇のやに…あられの音もとたへつる風の行衛に(定家)

お
⑷をのつから…(耕雲)

⑸としもへぬ…露やみへまし(正徹)

⑹咲花の…たなをさりの(正徹)

⑺音にそ鳴…行衛をやしる(正徹)

以上朱筆の内容を類別すると(A)最も多いのが仮名追の訂正一四例。(B)語彙の校異が四例。(C)助詞の訂正二例。(D)係結びの訂正一例など二一個所で、豊樹が訂正にあたつて最も注意を払つたのは仮名遣の問題であつたことが知られる。

⑻朱点の記入
その他、豊樹は為兼集を讀むにあたり確認の意味もあつたのか、

校異、訂正の朱筆書き入れのほかにも歌の首部に朱点を施している。その歌数は六〇首ほどであり、最も朱点の多いのは耕雲の二一首。ついで為兼一四首、正徹の九首。経信、為家、道家各一首ずつ。他は読人不知、不詳など。この中には初句の右側に朱点を施している歌五首あり、これはすべて正徹の歌である。次に例示しておく。

⑼いとへ、風千種なからも夕露の紐ときわたす花のいろく(草花盛)

⑽花、やく、袖こそ句へ月の中のかつらをいつる秋のさよ風(月前風)

⑾忘れすよ、風に音する下狹のほかにいひし名残ならねば(聞窓)

⑿わたらしよ、朽め絶せし橋板を降つ、雪も深き山河(橋雪)

⑿音に、そ鳴空によわたる友千鳥あとなき行衛をやしる(夜千鳥)

以上の五首の初句に朱点を施した意味は、すべて初句切れであり、豊樹は格調の上から初句切れに注意するためであつたと思われる。こうした点についても豊樹は為兼集を丹念に読もうとした配慮がうかがえる。なお、先の(三)と関連する朱書きの仮名遣の訂正も⑭には施している。以上の事から片山豊樹は地方に在住しながら北豊の歌人として令名をとどろかし、多くの詠草も残されたと思うが、散逸したのも多い。しかし、片山家には豊樹大人の色紙、短冊などが現在も同家の襖、衝立には貼られその遺品を見ることが出来る。そうした中に豊樹署名の刊本を持つ「為兼集」の残存していることは、豊樹大人が京極為兼の研究に先鞭をつけた一人としてその位置を高く私は評価したいと思う。

二、為兼歌風の生成と展開

為兼は鎌倉後期の動乱の中に生き、皇統としては持明院統に属し、京極派の統帥者としてその政治的辣腕を奮つた有力な官僚貴族であつた。歌人としては大覚寺統の二条派と対立し、伝統的歌風を否定し、みずからの手によって革新の烽火をあげ、遂に伏見院の院宣により応長元年(一三一)五十八才の時、ただ一人の撰者為兼が決定され、翌正和元年に奏覽されたが「花園天皇宸記」によると

以上のような関歴になるが、この期は官人としても歌人としてもいづれも基礎時代であった。花園天皇宸記（元弘二年三月廿四日の条）を見ると「彼卿者、右兵衛督爲教卿息也、自幼日昵近祖父爲家卿、和歌口伝等悉受之上、天性得風骨、拔萃之堪能也」とあり、幼時から祖父爲家の和歌口伝を受け、天性の風骨を得ていると賞揚している。また歌の指導の時機については、延慶兩卿訴陳状に「如三彼卿（爲兼）自称者、自文永七年至建治」とある。これによると十七才から廿二才頃ということになる。この頃の歌は、建治二年九月十三夜の仙洞（龜山殿）五首歌会の次の二首。

(1) 澄み昇る月のあたりは空晴れて山の端遠く残る浮雲（新後撰集秋上・爲兼後集・片山本37）

(2) はかなくぞありし別の暁もこれをかぎりと思はざりける（新千載集恋五・爲兼前集613）（②の詞書に建武とあるのは建治の誤り）

勅撰集入撰では最も初期の二首。(1)は清澄な格調、(2)の哀感は二条派とは異った視点からの歌になっている。二集とも二条派撰者の勅撰集で爲兼は冷遇されているが、これを出発点として京極風は成長してゆく。廿三才の時であった。さらに廿五才を迎えた弘安元年（一二七八）は爲兼にとっては歌壇進出の好機にめぐり逢った記念すべき年でもあった。それは龜山院が勅撰集下命の企画にあたり、当時の有力歌人たちの歌百首を召し、その中の一人に爲兼も出詠の好機を得たということである。この「弘安百首」は統拾遺集（爲氏撰）撰進の有力資料になった。現在は本百首の完本はないが、統拾遺集に「百首の歌奉りし時」とあるのは、この弘安百首のことである。

この百首出詠の歌は勅撰集に十五首入集している。その主な歌を少しあげてみよう。

(1) つかへこしよよの流れを思ふにも我身にたのむ関の藤河（統拾遺集卷十六・雜上）

(2) 山桜はや咲きにけり葛城やかすみをかけて匂ふはるかぜ（新後撰集卷一・春上）

(3) いか様に身を尽してか難波江に深き思のしるしみすべき（同卷十一・恋一）

(4) 立ち帰り又きさらぎの空さえて天ざる雪にかすむ山の端（新拾遺集卷一・春上）

(5) 荒れ果てし志賀の故郷来て見れば春こそ花の都なりけれ（同卷二・春下）

(6) この里はしくれて寒き冬の夜の明くる高嶺に降れる白雪（新後拾遺集卷六・冬）

(7) 悔しくぞただ時の間のうたたねにまだ見ぬ夢を結び初めける（新統古今集卷十四・恋三）

以上はその一部にすぎないが、(1)は定家の「藤川百集」（成立については嘉禎三年（一二三七）から四年説（七六才・七七才）と承久三年（一二二二）説（六〇才）の両説あり）の冒頭歌「たのみこし関の藤川春きてもふかき霞にしたむせびつつ」によって作った歌で、定家への傾倒を表明したものである。爲氏、爲世を越えて定家への復帰が爲兼の念願であり、二条派との軋轢を踏み越えて京極派樹立の情念はすでにこの初期において発芽していた。弘安元年には「性助法親王家五十首歌」が催されこれにも出席。次のような歌が

新千載集（二条為定撰）に入集している。

(1) 風渡る岸の柳のかた糸に結びもとめぬ春のあさつゆ

（巻一・春上）

(2) 夜もすがら置きそふ霜の消えがてに氷り重ぬる庭の冬草

（巻六・冬）

(3) うかりけるさの中河さのみなど逢ふ瀬絶ても恋渡るらむ

（巻十五・恋五）

新千載集は、二条派主流で当代の為世の四十二首に比すと為兼の十六首入集は余りにも少ないが、漸次為兼の歌も歌壇に認められていくことが知られる。以上の三首にしても二条派と異なった独自の目がある。

さて、前述の弘安百首には、為家の側室阿仏尼（安嘉門院四条）も為兼と同座した女流で冷泉為相・為守の母。為家の没後嫡妻腹の長男為氏との間に播磨国細川庄の相統争いが発り、翌弘安二年十月十六日都を出発し鎌倉に訴訟のため下向。その紀行文が「十六夜日記」であることは周知の通りであるが、為兼は

ふるさととはしぐれにたちし旅衣雪にやいとどさえまざるらん

という一首を贈った。阿仏尼も「かへし」の歌を詠んでいる。京極と冷泉は親しい仲にあった。二十才代最後の歌は弘安三年（廿七才）の内裏月五首歌会に出詠したもので、この一首も新千載集巻二十（慶賀歌）に採用された。「めぐり逢はむ千年の秋の行く末を月にぞちぎる雲の上人」この歌は題材の故か温雅な伝統的詠みぶりである。以上為兼の青少年における作歌経緯をあとづけて来た。弘安三年は対立者為世は卅一才。この二人の相克は漸次深刻になってゆ

為兼集と為兼歌風の生成過程

く。伏見院はまだ十六才を迎えたばかりであった。

(2) 壮年期

壮年期は為兼三十才代から五十才代までを設定した。為兼の歌人としては最も充実した得意時代と一方においては佐渡配流という政治的失意時代とが交替する運命に遭遇した時期であった。そのことは持明院統の伏見天皇の即位と西園寺実兼（太政大臣）との外戚關係。実兼と為兼との従僕關係という三者の結びつきに対して為兼と二条家との歌壇的軋轢抗争という一面があり、複雑な様相を呈していた。しかし為兼が壮年期に入り、卅四才の弘安十年（一二八七）に持明院統伏見天皇が廿三才で即位されたことは久しく待っていたことでもあり、一陽来復の好機であった。それは京極派為兼の歌人としての台頭というばかりでなく官人としての榮進にもつながることであった。歌については為兼は弘安三年七月伏見天皇の東宮時代から出仕し、歌の指導に当たっていたという深い師弟の關係にあり、この關係は、京極派グループ形成の温床の場になってこの後に大きな影響を与えた。伏見天皇を中心し実兼、為兼との政治的關係、また為兼自身の人間像については詳細に論じたことがあるのでここではくり返さない。(1)と同じように為兼の官歴と和歌、その他の主要關係事項の一覽表を示す。

後伏見院(統明)		後乾元(統寺)		花(持明院)	
五	二二九七	六	二二九八	延慶 三	一三二〇
44	45	46	45	正和 元	一一三二
持明院殿当座歌合(為兼判)	花園天皇生る	為兼六波羅に捕わる(正・七)	佐渡配流(三・十六)	権大納言(八・廿三)	大納言(八・廿三)
33	34	35	34	延慶 三	一三二〇
27	28	29	28	正和 元	一一三二
48	49	50	49	延慶 三	一三二〇
49	50	51	50	正和 元	一一三二
33	34	35	34	延慶 三	一三二〇
27	28	29	28	正和 元	一一三二
48	49	50	49	延慶 三	一三二〇
49	50	51	50	正和 元	一一三二

この表で明らかのように伏見天皇のもとにあつてはその信任は厚く、昇進も極めて早かった。為兼の壮年期における最も大きな仕事は、歌論書「為兼卿和歌抄」執筆と、「玉葉集」撰進の二つに集約出来る。為兼は廿六才で父為教を失った。為教は兄為氏とは不和で、以来為兼は二条家嫡流に対しては宿命的に熾烈な敵愾心を抱き、為氏、為世の穩健な伝統的歌風を否定し、和歌を革新に導く必要を痛感していた。そのためにはただ感情的にのみ走つても詮ないことで、具体的な作歌の上で、また新しい歌論確立が必要であった。「為兼卿和歌抄」の成立については不明であるが、「野守鏡」の成

為兼集と為兼歌風の生成過程

立した永仁三年以前に執筆されたことは明らかで、為兼の壮年期に入った弘安十年、卅四才頃、つまり伏見天皇即位の頃と思われる。本書は、諸神諸仏のことから起筆し、歌の歴史にも及んでいるが、歌の本質論としての心と詞との問題がその中心をなす。

「花にても月にも夜のあけ、日のくるるけしきにても、う事に(ママ)の(カ)が(マ)落(カ)ち(マ)そ(カ)が(マ)う(カ)に(マ)あ(カ)つ(マ)た(カ)か」

向きてはその事になりかへり、そのまことをあらはし、其ありさまを思ひとめ、それに向きてわが心のはたらくやうをも、心に深くあつて、心に詞をまする(マ)に(カ)、有(マ)興(カ)おもしろき事、色をのみ添ふるは、心をやるばかりなるは、人のいろひ、あながちに憎む

べきにもあらぬ事也。こと葉にて心をよまむとすると、心のままに詞の匂ひゆくとは、かはれる所あるにこそ」(書陵部本)

この所説は為兼歌論の基底をなすもので、単なる写真主義というよりもさらに対象に深く踏み込んだ象徴主義の樹立であった。「こと葉にて心をよまむとする」という形式的言語表現の世界と、「心のままに詞の匂ひゆく」という内容的感動主義の世界とは全く次元を異にするということを明確に区別した。ここに為兼歌論の特色を見出だす。この所論は二条家派には全く見られない新しい作歌の根源を問うているのである。この壮年期は為兼にとつては京極派革進歌人としての決意を新たにした出発点でもあった。しかしこれを実作の上から見ると伏見院を始め為兼ら極派グループの歌は歌壇的にはまだ十分評価される時期にはきていなかった。永仁三年九月成立の「野守鏡」の著者(少納言平輔兼入道八横川の真縁上人)推定)により京極派の歌風を否定されたのもこの間の消息を物語るものである。この事は歌の問題であるが、伏見天皇の長期政権をねらう為兼と関東申次の位置にあつた西園寺実兼との離反という政治問題がおこり、京極派の理解者でもあつた実兼は幕府とも親しくしなければならぬ立場にあり、両統迭立という幕府の方針のもとに実兼は大覚寺統に近づき、為兼は佐渡立派という悲運に遭う結果となつた。歌人でもあり、政治家でもあつた為兼は大きな痛手を受け、配所の月を眺めなければならなかつた。正安三年大覚寺統の後二条天痛が即位。この年、為世に新後撰集の院宣が下つた。

佐渡の配所に於ては、(1)百首(類従本98首)と(2)遠所三十三首と(3)名号歌卅八首(三部の構成を待つ)を詠んでいる。(家集八後集)

に所蔵) (1)は伏見天皇の仰により永仁六年佐渡において詠み、「夢告」により乾元二年十月六日に春日社に奉納したものである。(為兼卿記乾元二年十月六日の条による)

・すみなれし雲井をこふる月の夜に哀れをそへて鹿も鳴くなり

・雲のうへに通ふとみつる夢だにも鹿の鳴く音に又たえにけり (懐旧)

・鹿のなく声のうちにも常ならぬ世のことわりは離れざりけり (夢)

・あやまらぬ身をやはすてむことわりを哀れ定めし春日野の鹿 (無常)

・みかさ山君のさかえを松風に鹿も干とせの声かよふなり (祝)

佐渡配所の孤独の中にあつてよくも鹿のみの素材で春夏秋冬恋雜を通して百首まとめたものである。以上の歌は最後の五首であるが

為兼の心境を最もよく伝えたもので末尾に伏見天皇の御代を景慕した一首を以て終つたのもゆかりの春日神社法楽歌としてふさわしい

百首であつた。(2)は、第一首目「あら玉の春のこえぬとあふ坂の関さへかけてかすむ木のした」から始まり、第三十一首目の「てを折

てかぞへつくまぬ万代を君より外にたれかしるらん」(類従本)に

終るが、三十一首の各歌の第一句の第一音を横に読むと「あふこと

をまたいつかはとゆふだすきかけしちかひをかみにまかせて」の一

首になり、三十一首の第五句の最後の音を横に読むと「たのみこし

かものかはみづさてもかくたえなばかみをなほやかこたむ」の一首

となり合わせて三十三首となる。この二首の所懐を本歌として「沓

冠」という折句の技巧を用いた複雑な三十三首の構成となっている。(全作品は紙幅の関係で省略) 文芸としての評価は高くないとしても「あふことを」「たのみこし」の二首は都への召還を神に祈念した心懷を詠んだ歌。(3)の名号歌は更に複雑な技巧をもつ。

その一は、二十首で、為兼帰洛の祈念のことは「南無白山冥利権現思ふことかなへ給へよ」を「南裳葉具佐」「無免宇利古」

「無氣無於裳」「婦古登加奈」「遍多萬遍興」の各五字に変え、これを五行に配し、この字音をそれぞれの歌の各句の第一音になるように詠みこんだ歌を縦二首(順と逆に読む)ずつ五行十首。横二首(これも順と逆に読む)ずつ五行十首になるよう四角形にこれを配別し極めて複雑な構成をとっている。その二は、「あみたふつ」を五行に、その一と同じように二十五字を配してそれぞれの歌の各句の第一音になるように詠みこんだ歌を縦横一首ずつ五行で十首。さらに斜に交叉するように二首を配して計十二首を詠んだものである。その三は、同じく名号歌で次の六首。六首の第一句目を横によむと「なむあみだぶ」となる。

- ・ なきあとをなげくばかりの涙川流れの末はながき滝つせ
- ・ むつまじくむすぶ契のむつごとむなしき空の雲
- ・ あはれさも跡に残りてあぢきなくあけぼのてらすあり明の月
- ・ みつ汐にみのりの舟のみなれ棹みだのちかひにみはうかみけり
- ・ たれもみな頼をかけよ他念なく他力の信ぞただ佛なり
- ・ ふたつなく不捨の誓願不思議にて深き願ひぞ不退とぞ思ふ

こうした心の底からの為兼の歌に仏も納受してか、やがて帰洛の日がおとずれるのである。乾元二年(一三〇三)閏四月京に召還さ

為兼集と為兼歌風の生成過程

れ以前と同じく伏見院に出仕した。時に五十才。ここに再び京極派には五年ぶりの春がめぐって来た。院の御所では同年閏四月廿九日に仙洞五十首歌会が催された。いわば為兼帰京祝賀の歌会で、為兼の成績は必ずしもよくはなかったが、彼の新しいリアリズム樹立の決意が込められていた。衆議判ではあったが、後日為兼が判詞を記している。作者は伏見院を始め二十人。為兼は右方、伏見院と番い五首を出詠。左に示す。

・ さそひ来る梅や桜の色香にて風なつかしき正月きさらざ (一番・春雨)

・ 秋近き野原の草の夕かげに村雨降りて風ぞ涼しき (十一番・夏雨)

・ 末なびく千種の花の色を染む姿をなすも秋の白露 (廿一番・秋露)

・ 峰の雪をむらく雲に吹きまぜて渡る嵐はかたもさだめず (卅一番・冬雲)

・ 暮ごとに思ひぞまさる待ちし頃うさ哀れさにかはるいままで (四十一番・恋夕)

いずれも対象を客観的によく見据えて詠んでいる。「末なびく」の歌は為兼集の前集・後集にもあり、また藤葉和歌集卷三(秋歌)にも採用している。この歌合には伏見院を始め永福門院、実兼、九条左大臣女・為子・親子・兼行その他玉葉集の勝れた作者たちが大方顔をそろえ、京極派歌風の確立された時機で岩佐美代子氏がこの期を京極派の前期の第一次開花期の興隆期と位置づけをしていることは首肯出来ることである。ついで五月四日には持明院殿におい

て三十番歌合が催され、伏見院はもとより後伏見院ら京極派がここにも結集。為兼は三首出詠。この時の判者は為相。親交ある二人が出席していることも反二条派の動きが見られる。京極派は為兼一人の力ではなくグループ意識のもとに強く結びつき、そこに京極派のエネルギーが始動してゆくのである。その意味でも乾元二年は記念すべき年で、金玉歌合・為兼家歌合もこの頃催されたものと思われる。金玉歌合は伏見院（左）と為兼（右）の結番歌合で六十番。いわば君臣双方のなごやかな歌合であったらう。この歌合から為兼の歌は玉葉集に十三首、風雅集に七首入集している。その例歌を少し挙げておく。

(1) 露重る小萩が末は靡きふして吹きかへす風(玉葉集卷四・秋上) 花ぞ色そふ(十七番・右)

(2) 闇のうへはつもれる雪に音もせでよこぎる（同卷六・冬） 霰窓たたくなり(廿八番・右)

(3) 旅の空雨の降る日は暮れぬかと思ひて後もゆくぞ久しき（同卷八・旅） (五十二番・右)

(4) 訪はむしも今はうしやの明方も待たれずはなき月の夜すがら（同卷十・恋） (卅六番・右)

(5) 梅が香は枕にみちて鶯の声より明るる窓のしものめ（風雅集卷一・春上） (三番・右)

(6) 夕日移る柳の末の秋風にそなたのかりの声もさびしき（同卷六・秋中） (廿三番・右)

(7) 大空にあまねくおほふ雲の心国土（同卷十六・雑中） うるはふ雨くにすなり(五十四番・右)

以上はその一部に過ぎないが、(1)・(5)には新古今の残照があり、(2)は対象を細かく見ている。(3)も実感であるが二条派の「歌苑連習事書」から「幼き者の歌などといひつべし」と非難をうけた。(4)には新しい恋の視点をもち、(6)の視覚、(7)の万葉の大らかさは二条家には無く為兼の志向する世界であった。ついでこの頃には「為兼卿家歌合」を自宅で催す。作者は為兼・為相・為子・経親の四名。実際は三十六番と思われるが、類従本では廿八番で以下闕となつている。年代は未詳だが（乾元二年から徳治三年頃の間か。50才―55才までぐらい）親近の者たちのみが集つて為兼帰洛を祝しての小規模な歌合であつたらう。判者も未詳であるが伏見上皇とする説もある。（為兼出詠は十三首だが類従本は一首闕のため十二首。十五首が完全な数であらう）次に後の歌書にも引用された歌のみをあげておく。

(1) さだかには其色となき景色にも唯春めける今朝にぞありける（夫木抄卷三・立春） (一番春朝左・持)

(2) 梅の花くれなる匂ふ夕暮に柳なびきて春雨ぞ降る（玉葉集卷一春上） (夫木抄卷三・梅)

(3) かつ散るも梢も今をさかりにて月もる庭の花の下かけ（家集前集・春夜） (藤葉和歌集一卷)

(4) そのほか「家集補遺」にもこの歌合から十集載つているが省略。
そのほか「家集補遺」にもこの歌合から十集載つているが省略。

(2)は、玉葉集に為兼自身採用しているから自贊の歌だらう。判詞に

は「梅柳雨中之粧。猶少三比類」と称賛して勝にしている。艶なる叙景歌として秀れている。(1)・(3)にしても叙景歌で対象をよく把握している歌である。

さて、為兼壮年期を少しふり返ってみると永仁元年伏見院におかれてはかねてから勅撰集撰定の企画があり、八月に為兼・雅有・二条為世・九条隆博らに勅撰集撰進を下命したが、隆博・雅有の他界に為兼の失脚などにより実現されなかった。その後乾元二年閏四月に為兼は佐渡より帰洛。伏見院を始め為兼ら京極派にとつては捲土重来の好機が到来した。伏見院下命の勅撰集は一度挫折はしたものの為兼は撰集準備を着々と進めていた。奏覧の機が熟し、しかも為兼の一身奏覧を聞いた為世は延慶三年(一三一〇)正月二日朝廷に為兼の撰者不適任の旨を訴え、為兼は二月三日朝廷に陳状を送って反駁。以後七月まで三度の訴陳がくり返された。世にいう「延慶兩卿訴陳状」がこれで、二条派と京極派(冷泉家を含め)との対立はいよいよ熾烈を極めてゆく。この背後には為世撰の新後撰集(嘉元元年)に京極・冷泉兩派の歌人入集歌数が極めて少なかったことに不満のあったこともかかわっている。為兼は京極派の手による勅撰首を実現せねばならなかった。彼の意志は遂に玉葉集撰進により結実した。正和元年(一一三二)為兼五十九才。これは為兼壮年期を飾る画期的勅撰撰集の大事業であった。次に玉葉集・風雅集の中で為兼の特色を示す歌を少し引用しておく。(壮年期ではあるが年代不明の歌も含む)

(1) 枝にもる朝日の影のすくなきにすずしきふかき竹の奥かな

(玉葉集・卷三夏歌)

為兼集と為兼歌風の生成過程

(2) いかなりし人の情か思ひ出づるこしかた語れん秋の夜の月

(同・卷五秋下)

(3) 浪の上に映る夕日の影はあれど遠つ小鳥は色くれにけり

(同・卷十五雜歌二)

(4) 沈み果つる入日のきはにあらはれぬ霞める山のなほ奥の峰

(風雅集・卷一春上)

(5) 松を拂ふ風は裾野の草に落ちてゆふだつ雲に雨きはふなり

(同・卷四夏歌)

(6) 哀れさもその色となき夕暮の尾花が末に秋ぞうかべる

(同・卷五秋上)

為兼の歌は玉葉集に卅六首、風雅集には五十二首の多くの歌が入集している。まさに京極流の主動的な特質をここに見ることが出来る。ここには僅か六首にしぼったが、(1)・(3)・(4)・(6)には対象を精細に把握し、しかも色彩的感覚が鮮烈に凝縮されている。(2)には客観の中に心情的述懐を生かし、(5)の字余りは効果をあげ格調も高く大らかに歌いあげた。こうした歌柄に為兼の特色を集約したものであり、二条派の伝統からは決して発想されない京極派の特色を示す世界であった。まさしく為兼壮年期は京極風後期における興隆期にあたり歌人としても成すべきことは十分果たし得てこの期は終る。

(3) 老 年 期

老年期は正和二年(六十才)から元弘二年(七十九才)の没年までの十九年間である。為兼は正和二年、伏見院と共に出家し法名を蓮覚、のち静覚と改めた。出家はしたもののそのまま穩棲するという型の人物ではなかった。この期にも歌合は催されている。「花園

結 び

院宸記」の正和三年正月廿七日の条には「今日内々有歌合、雪中梅、遠山霞、大納言入道出題」とあるのがそれで、六十一才の為兼が出題し、持明院統の内々の歌合であった。しかし為兼の歌は見えない。翌四年四月廿三日には一門を率いて奈良の春日大社詣でを敢行し、関白家平以下の顯官が列したという豪華さが西園寺夷兼の忌諱に触れ失脚（土佐配流）の原因となり、佐渡についての二度目の配所生活の悲運に遭った。奈良には廿八日まで滞在し、為兼主催の「春日宝前歌会」が開かれた（統史愚抄）。しかしこれらの歌は経文の内容を詠みこんだもので京極派の作品としては高く評価することとは出来ない。その他この期にも歌は作ったと思うがその時機の決め手がかめない。正和二年の六十才に玉葉集の終功を得ている。二十一代集最大の歌数（流布本・二八〇一首）を有するという形式的なことのみでなく京極派の勅撰集として二条派撰とは異なる革新に立ち、客観、叙景のリアリズムを樹立したことで為兼の個性はもとより伏見院、永福門院らを始め持明院統の支持を得て画期的な勅撰集を生み出した。中世和歌史におけるその位置は重い。為兼生涯におけるエネルギーは玉葉集に燃え尽した。庶流為兼の歌業は二条派の重圧を受けたが、彼は決してこれに屈服はしなかった。京極派の系譜は彼の没後においても三十余年後の風雅集に継承された。そこには政治的、歌壇的にも変貌すべき歴史的要因もあり、玉葉集そのままの形ではないが、新しい意欲的作歌精神の再生を見ることが出来る。

玉葉集撰進後においても為兼は各種の歌合にも出度はしているが、年代不明の歌が多い。土佐における彼の動静については資料も乏しいが、風雅集巻九旅歌の中に「前大納言為兼安芸国に侍りける所へ尋ね罷りて題を探りて歌よみけるに、海山と言ふ事」という詞書を持つ道全法師の「海山の思ひ遣られし逢けさも越ゆれば易きものにぞありける」の一首があり、一時は優免されて安芸国へ移ったことが知られる。また花園天皇宸記によると「近年聊有優免之儀、移三和泉国（元弘二年三月廿四日の条）とある。これによると和泉の国にも後に移っている。その後も花園天皇は後伏見上皇に為兼を優免を乞うているが遂に許されなかった。花園天皇は元弘元年には近年御詠一卷を為基（為兼の猶予俊言の息）に持参させ判を乞われ、為兼はこれをお返ししている。無聊な土佐の配所においても為兼は天皇との歌の通い路を保たれた。またその御質問に「仏法和歌更不可有差別」（同三月）とお答え申しあげた。これは為兼の晩年に到り得た和歌仏道一如観であった。土佐配流十六年間、和泉からさらに河内国に移ったが京には遂に帰ることなく元弘二年（一三三二）三月廿一日、七十九才の波乱万丈の生涯を閉じた。

京極派の消長は伏見院、永福門院のもとにその歌の指導者為兼の活動と共に存在したのであるが、政治家為兼の行動による失脚挫折とからみあい、その活動期の頂点は玉葉和歌集において結実される。為兼の二条家に対する反逆精神は不俱戴天のもので終生不変であった。玉葉集の客観叙景という新しい変革は二条家嫡流には全く

見られない作歌方法論であり、「為兼卿和歌抄」における感動尊重の歌論形成の骨格もそこに位置づけられるものであった。

私は本稿において、(一)は為兼全の新資料として片山豊樹本の内容をさぐり、(二)には多くの先学以示唆を与えられたが、とりわけ小原幹雄氏の為兼に関する研究の労作に多くの学恩を受けた。ここに記して謹んで厚くお礼を申しあげたい。私の為兼研究は緒にいたばかりで、今後なお考究を進めたいと思っている。

参考文献の注

- (一)・(二)「為兼集」乙集の考察(島根大学文学部紀要第四号・昭和46・3月)「為兼集」甲集の考察(同紀要第五号・昭和47・3月)

(三)拙稿「京極為兼の人間像」(梅光女学院日本文学研究第十七号・昭和56・11月)

(四)野守鏡考(寺崎修一・「文化」昭和10・3月号)

(五)「和歌文学の世界」第六集「京極為兼」・(昭和53・7月)その他、為兼に関する主要論文参照。次の通り。

- 「京極為兼論」(上田英夫・「国語と国文学」昭和7・6月号)
○「為兼卿集の成立」(次田香澄・「文学」昭和12・12月号)○「為兼伝の考察」(次田香澄・「国語と国文学」昭和15・11月号)
○「玉葉集の成立とその伝来」(次田香澄・「文学」昭和16・5月号)○「京極派風の一問題」(谷宏・「国語と国文学」昭和22・8月号)○「京極と万葉との問題」(谷宏・「文学」昭和23・2月号)○「玉葉風雅歌風」(谷宏・「国語と国文学」昭和23・

為兼集と為兼歌風の生成過程

9月号)○「延慶両卿訴陳状の成立に関する資料」(福田秀・「国語と国文学」昭和32・1月号)○「京極家の成立」(「国文学研究」昭和33・3月号)